慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千八百三十三年版ヂョーヂ・ポーレット・スクロープ著 経済学の諸原理
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.11 (1942. 11) ,p.945(61)- 967(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19421101-0061
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19421101-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

同様に再び注目すべき調査は現はれてはゐない。本論の最初にも述べて置いたやうに、唯だ鑛夫の調査に就いて、見るべきものが殘され、その内に於いて鑛夫の勞働移動の問題が稍々形を整へて現はれてゐるに過ぎない。そして此處でも亦、鑛夫の移動の問題が彼等の勤續年數の問題と並んで取り擧げられて居り、更らにこれ等の問題が、鑛山に於ける諸經營勞働者政策の調査の内で取り擧げられてゐるところは、「職工事情」調査の意圖に沿ふものゝやうに思はれる（註）。かくして明治四十四年の工場法の成立に至るのであつて、改元と共に此處で一と先づ時期を劃ずことが便宜である。

そしてその後、勞働移動の問題に對する政府の關心は、先きの歐洲大戰時の好況期に現はれ、またこの後大正九年以後の產業界の沈滯の時期に現はれ、更らに支那事變開始後間もなく出現して、今日に至つてゐるといつていゝ。しかもこれ等の時代は各々違つた特質を示すものであつて、この時代的な相違はまた問題に對する政府の關心に違つた特徴を與へてゐるやうにも思はれるのであるが、これに就いては、何れ稿を更めて、別に論ずることゝしたい。

（註）本論中、私は鑛夫の勞働移動の問題の理解に就いては、全く述べるところがなかつたが、この點に就いては、別に當時の鑛夫移動事情を問題とする際に、觸れてみたいと思つてゐる。

古版經濟書解題

一千八百三十三年版チョーチ・ポーレット・スクロープ著『經濟學の諸原理』

高橋誠一郎

一

吾人は昭和十二年版『經濟學史』上卷に於いて、英國利子學說史上に於けるナッソー・ウィリアム・シニィオアの先蹤として、忘れられたる經濟學者チョーチ・ポーレット・スクロープ（George Julius Poulett Scrope）の名を擧げたのであるが、而も當時は單に彼れの『社會福利の自然法から推論せられ而して英國の現狀に適用せられたる經濟學の諸原理』（Principles of Political Economy, deduced from the Natural Laws of Social Welfare, and applied to the Present State of Britain.）中、其の第七章「資本」よりの引用文を掲げて、シニィオアの所說との異同を觀んとしたに過ぎなかつた。（同書五二一―五二三頁）。吾人は今玆に本書の全般に亙つて解題を施さんとする。

スクロープは一千七百九十七年三月十日倫敦に生れた。彼れの父ジョン・ポーレット・タムサン（John Poulett Thomson）は露西亞貿易に從事せる商人であつた。彼れの弟に若くして逝けるチャールズ・ポーレット・タムサン（Charles Poulett Thomson）、即ち後のシデネム卿（Lord Sydenham）があつた。スクロープは初めハロー校を經て、

牛津大學のペンブルーク・コレッヂに入り、此處に二學期間在學せる後、一千八百十六年に劍橋大學のセント・ジョンス・コレッヂに移り、同二十一年、文藝得業士の稱號を授けられた。同年ウィルトシャ郡カッスル・コームのウィリアム・スクロープ(William Scrope)の相續人エマ・フィップス・スクロープ(Emma Phipps Scrope)と結婚して舊姓クムサンを改め、妻の姓スクロープを名乘ることゝなつた。彼れは劍橋の地質學者エドマンド・ダニエル・クラーク(Edmund Daniel Clarke)及びアダム・セジウィック(Adam Sedgwick)から其の生涯を通じて失はれることのなかつた地質學に對する興味を與へられた。一千八百十七—八年の冬を兩親と共にナポリに過したのを初めとして、廣く旅行して資料を蒐集し、一千八百二十八年 Considerations on Volcanoes. を著し、總べて地殼の岩石は水成なりとなす獨逸の地質學者ヴァーナー(Abraham Gottlob Werner)の說に反對した。彼れは一千八百二十五年、チャールズ・ライエル(Charles Lyell)と共に地質學協會の幹事となつた。ライエルは彼れと同年の地質學者であつて、後、一千八百三十—三十三年、ダーウィンの Origin of Species. に次いで第十九世紀の科學思想史上に最大なる影響を與へた Principles of Geology. を公にして、地質學上に於ける大激變說を拒否し、過去に於ける最大なる地質上の變化も現在に於いて猶ほ作用しつゝある諸力によつて生ぜしめられ得ることを敎へ、生物學を基礎とする層位學の體系を完成せる人であつた。スクロープは一千八百二十六年、Geology and Extinct Volcanoes of Central France. と題してオーベルヌに於ける其の調査の結果を發表し、同年、王立協會員に擧げられた。彼れにして若し其の身を地質學の研究のみに捧げることが出來たならば、彼れは、如何なる競爭者をも凌駕することが出來たであらうと云はれてゐる。

然るにスクロープはウィルトシャの治安判事となつた時、農業勞働者の多難なる狀態に動され爾後永く經濟上及び政治上の事項に對する關心を失ふことが出來なかつた。彼れは地方長官として或ひは同じき長官等に對する公開狀に於いて、或ひは諸小冊子に於いて、時事問題に關する其の意見を表明して居つたのであるが、軈がて馬を中原に驅せんことを志し、一千八百三十二年、ストラウドに於いて下院議員候補の名乘を上げた。最初は不幸にして落選したが、翌三十三年其の希望を達成し、爾後六十八年に至る迄、同選擧區を代表して下院の議席を占めて居つた。彼れは議會に於いては沈默を守つて居つたが、印刷物に於いて、委員等の前に、而して又、委員會に在つて活躍し、其の經濟理論を縷說して倦む所がなかつた。彼れは銀行及び通貨問題、救貧法改正、農業勞働者の窮狀等に關する夥しき數の短論篇を公にして「小冊子のスクロープ」(Pamphlet Scrope) と稱せられた。スクロープの筆に成つたことが疑ひのない最初の經濟上の出版物は一千八百三十九年の A Plea for the Abolition of Slavery in England, as produced by an illegal abuse of the Poor Law, common in the southern counties. であると言はれてゐる。而して、彼れは一千八百三十三年、經濟學上に於ける其の主著『經濟學の諸原理』を著して、其の諸小冊子中に表明せられた主張を其の中に包含せしめたのである。

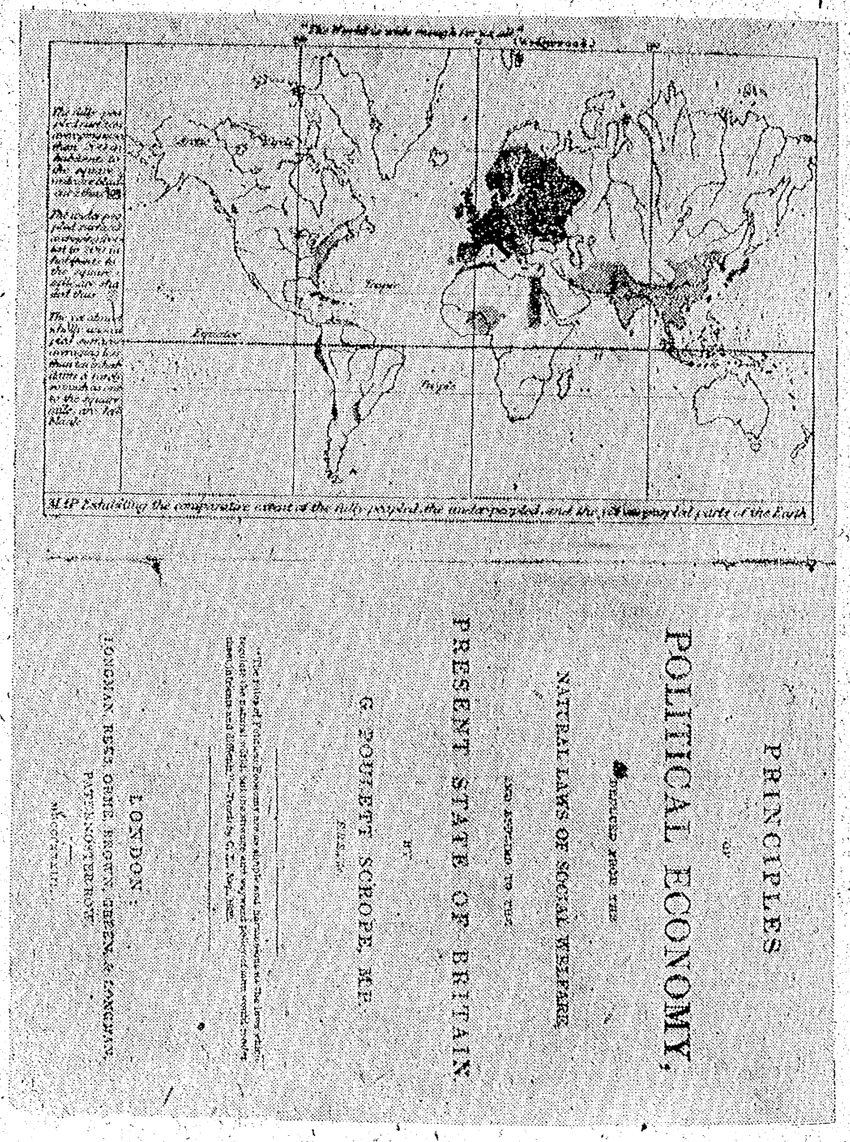
二

本書は前附の裏頁にエドマンド・バークの Tract on the Popery Laws. よりの引用句を揭げ、次ぎに口繪として人口の密度を表した世界地圖を載せ、之れに題するに「此の世界は吾人の總べてを容るゝに充分なる廣さを有する」と云ふウェッヂウッド(Wedgewood)の語を以つてし、而して表題頁には「經濟學の準則は、自然界を支配する諸法則の如く、單純且つ調和的ではあるが、而も、人間の奇異にして恣意的なる政策が是れ等のものをして複雜にして困難ならしめたのである」と云ふ一千八百三十二年版シィ・エハと名乘る人の短論篇中の一章句を題せしめてゐる。

本書は、ストラウド選擧區民に對する獻本の辭並びに序文に於いて、（pp. iii-xvii）、緒論として社會に於ける人間の權利、義務及び利害の一致に就いて述べる。

彼れは自然法哲學の極端なる解釋に陷ることなく、自由放任主義に對して批評的であり、制度的拘束の價値を力說するものである。彼れは勞頭先づ「苟も存在する所のものは正當である」と云ふ公理を否認する。（p. 1.）。彼れは、個人的行動の自由に對する一定の制限の便益を認める。（p. 6.）。彼れは人類を指導す可き準則を設定するの重要性を强調する。一の社會が據つて以つて特殊の行爲に其の是認若しくは非認を與ふる準則は其の倫理上の正及び不正の總念を構成する。而しこい是れ等のものは教訓によつて弘布せられ、又相互の傳達によつて確認せられて、輿論と稱せらるゝ所のものを組成する。其の社會が如何なる場合に、强制的に、換言すれば、刑罰によつて干涉す可きかの決定に對して設定せられた準則は法律、換言すれば、法律上の正及び不正の確定的法典を構成する。（p. 9.）。倫理的及び法律的準則は、共に、其の誤らざることの唯一の標準たる抽象的若しくは自然的正義の原理と一致す可きものである。（p. 10.）。各個人の社會に對する要求は彼れの權利と呼ばれ、他人の諸權利を尊重す可き彼れに對する社會の要求は其の義務と稱せられる。各個人の諸權利及び義務は、斯くて、相關的、即ち互に相依存し合へるものであつて、同一準則によつて規定せられる。（pp. 10-11.）。スクローブは、人間のあらゆる行爲は必然利己的動機を有すると說く一派に赴くものではなかつた。（p. 12-13. note.）。

著者は人間の自然權を以つて恐らくは（一）個人的自由に對する權利、即ち、苟も自己を利する以上に他人を害することのない總べてのもの、換言すれば、彼れ自身の福利も其の一要素たる一般的福利と矛盾することのない總べてのものを行ふ可きあらゆる人間の權利、（二）造物主の共同の賜物に對する總べての人類の平等の權利、（三）財產



に對する權利、及び(四)良政府に對する權利の四箇の單純且つ本原の項目に分たるゝを得可きものと觀る。(pp. 13-27.)。彼れを以つて觀れば、政府の設立せらるゝ第一目的、從つて又、其の主要義務は、其の支配する總べての個人に對して彼れ等の自然權の充分なる享有を確保することと、換言すれば、一般的福利と相容るゝ取得し得る幸福の最大量を保證するに在る。(p. 28.)。一社會の幸福を決定する所のものであつて又或る程度迄其の政府の支配內に存する事項を以つて、彼れは(一)其の人民の倫理的及び宗教的教育、(二)彼れ等が個人的に身命の危害より確保せらるゝの程度及び(三)彼れ等が個々に生活の必需品、快樂品及び物質的享樂品を供給せらるゝの程度であると做してゐる。(p. 32)。經濟學の對象たるものは唯り此の最後のもののみである。(p. 35.)。

著者が本緒論中に於いて、社會に於ける人間の諸權利、義務及び利害の一致を論じたる所以のものは、實に、是れに由つて經濟學の眞の趣旨及び範圍をより大なる適確さを以つて限定し、而して又、個人の權利及び政府の義務に關する公理的諸原則の基礎を確立せんが爲めであつた。其の上に立つて經濟學の格率は、單なる好奇的且つ趣味的思辨の性格を有するものではなくして、政府の側に於ける免れ難い義務並びに被治者の側に於ける疑問の餘地のなき權利の準則の性格を有することゝなるのである。(pp. xv-xvi.)。

三

スクロープは、經濟學を以つて、社會の幸福が其の富の豐富と分配とに依存する限りに於いて之れを其の眞の研究主題とするものであると做してゐる。(p. 41.)。經濟學の諸原理は明かに、特殊の事情の下に於ける人類の擧動及び感情に關する定理から演繹せられなければならぬものであつて、後者は一般的にして廣汎なる觀察に基いて構成せられる。斯くて經濟學の諸原理に屬し得る確實の最高度は唯り心證上の蓋然性に達す可きものであつて、物理的諸科學の法則を特性附ける精確性を去ることの遠いものでなければならぬ。是に於いて乎、彼れは經濟學の結論に數學的確證の力を歸せんとする多數の學者の擧に反對する。經濟學は決して數學の如き正確科學の性格を享有するものではなくして、其の觀察する事實は、人間の苦痛及び快感、嫌忌及び好尙――「希望、恐怖、歡喜、憂愁、流涕及び微笑」を構成するが如き可變的にして、茫漠且つ不確實なる本體のみから成るものである。而も猶ほ、彼れは人間の行爲及び人間の幸福に關する一般的諸法則が充分に一般的準則を構成するに足る正確さを以つて確めらるゝことを認める。(pp. 41-42.)。

スクロープは實にシニオアに先き立つて經濟學の方法を論じ、後者が經濟學の主題を以つて幸福に非ずして富なりと做せるに對し、彼れは富に依存する限りに於いて社會の幸福を以つて其の主題と觀、率直に福利經濟學に興味を有することを表明し、後者が經濟學を一箇の數學的科學たらしめんとせるに對し、彼れは經濟學上の諸原理が數學的論證を許すものに非ざることを主張したのである。

四

幸福との關係に於ける富を以つて經濟學の研究主題と做したスクロープは、富によつて常に賣買せらるゝ、即ち交換せらるゝ生活の必要品、快樂品及び奢侈品の總べてを了解すると言明し、而して富の簡略なる定義が所望せらるゝならば、總べての購入し得る人間享樂の手段を包含すると宣言せらるゝを得可きものと做した。(p. 43.)。總べての賞却し得る財產、即ち富は煩勞若しくは勞働の所產である。而して、混亂を避けるが爲めに、此の勞働なる名辭を富を生產する靈力に限定することが望ましい。(p. 46.)。斯くて彼れは如何なる種類の勞働が生產的にして、又如何なるものが不生產的なりやに關する經濟學に於ける無用の論爭を回避しようとするのである。彼れに從へば、

勞働は犧牲たるよりも寧ろ快樂である。（pp. 46-49.）。然しながら、勞働は自由でなければならぬ。（p. 49.）。そは又、充分に報酬を與へられなければならぬ。勞働に對する充分なる報酬は、勞働者をして、時々の休日に於いて恣にし、又、病氣、怪我及び老齢に對して準備を爲すを得せしむる外、安樂なる生存の資に於いて彼れと其の家族とを看出す可きよりも小であつてはならぬ。（pp. 50-51.）。彼れは富が幸福の確實なる尺度に非ざることを注意し、而して閑却す可らざる他の標準の存することを說くを怠らない。（pp. 54-55.）。

次いで、彼れは、有史以來、あらゆる處に於いて、又常に、人間は財產權の自然的基礎たる單純なる擅有の原理に基いて富の生產に努力し來つたものであると說き、（p. 60.）、軈がて私有財產の制度に就いて論じ、共產の原理は生產の自然的增加に取つて不利なるものとして排斥せられなければならぬものであると做した。（p. 64.）。而して、彼れは、總べての富は勞働の產物ではあるが、而も勞働のみの產物ではないと述べ、生產の要素として、勞働、土地及び資本の三者を擧げ、逐次別箇に是れ等のものに就いて考察せんとする。（pp. 65-68.）。斯くて、彼れは夫々章を分つて、勞働、賃銀、土地及び資本に就いて論ずる。（chaps. iv-vii.）。

彼れは資本を以つて、曩時の勞働の結果であつて、土地に添付せらるゝことなく、人間の能力と合體せらるゝことなく、個人的消費の爲めに保留せらるゝことなくして、其の所產の賣却から利潤を得るの目的を以つて、生產に使用せらるゝか、若しくは生產に使用せらるゝが爲めに保留せらるゝ所のものと觀る。（pp. 137-141.）。而して、彼れは、資本家の資本が置き換へられた後に於いて彼れに生じた餘剩が、資本の使用に對する彼れの唯一の報酬であつて、其の利潤と稱せられると做し、而して、利潤は資本家をして彼れの資本を生產に使用せしむる其の誘因であつて、恰も賃銀が勞働者をして其の熟練と力とを同一の方法に働かしむる誘因を形成するに等しいものであると主張した。（p. 145.）。而して、スクロープが、資本の生產的使用よりして其の所有者によつて取得せられる利潤は、彼れが個人的滿足に彼れの財產の該部分を消費するを暫時控へることに對する彼れへの補償として觀察せらる可きであると做せるの點は、實に、彼れをしてシニィオアの先蹤と看做さるゝに至らしめた所のものである。（p. 146; Eugen von Böhm-Bawerk, Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien, 4. Aufl., 1921, S. 243. 前揭拙著五二一—五二三頁參照）。彼れはトマス・ホッヂスキンの Popular Political Economy, 1827. Labour Defended against the Claims of Capital, 1825. 及び其の他の著を擧げて、資本を以つて社會の害惡と做し、又、其の所有者による資本に對する利子の徵收を以つて、惡習、不正、勞働者階級の强奪と做して之れを攻擊する者あることを不可思議とした。（p. 150.）『三田學會雜誌』第三十三卷第三號所載拙稿『第十九世紀前半英國社會主義學說の對抗理論として發達を見たる限界效用學說の先蹤』五七頁、並びに前揭拙著五〇九—五一〇頁參照）。

スクロープは又、利潤を分析せる最初の英國經濟學者の一人と觀られてゐる。彼れに先き立つてホッヂスキンの『勞働の擁護』に對し酷評を下したものにサミュエル・リード（Samuel Read）があつた。（Political Economy, An Inquiry into the natural grounds of right to Vendible Property or wealth, 1829, pp. 125-132.）。スクロープは一千八百三十一年一月 Quarterly Review. に揭げたる論文 The Political Economists. 中に於いてリードの著を論評し（vol. xliv, pp. 1-52.）、而して此の書に由つて重要なる示唆を受けた。制欲に對する報償（compensation for abstinence）なる辭句は實にリードに發するものであつた。（ibid., p. 18.）。スクロープは、普通の用語に於いて利潤と稱せらるゝものゝ一定部分は疑ひもなく賃銀の性質を有するものであり、他の部分は、屢々、秘密の製法、特許を與へられた用具若しくは機械、優れた取引先關係、報道、地方的地位の便宜其の他の如き獨得の利益を有するの

事實から生じつゝある獨占利得から成り、他の部分は其の資本が使用せらるゝ業務に起り勝ちの特殊の危險に對する補償から成ることを認める。當然資本の純利潤若しくは利子、即ち一身の勞働若しくは特別の危險なくして取得せられ得る資本の暫時的使用に對する報酬を形成する所のものは唯り其の殘餘部分である。斯くの如きものは使用せらるゝ資本の貨幣價値に對する歩合として計算せらるゝの常である。而して、それは其れ自體(一)直接の個人的滿足の犧牲に對する補償、(二)財産の一般的安全に影響することある可き事情に由る損失の危險に對する保險から成るものである。利子の後の要素は國内の安寧、財産を脅すが如き外國の侵入若しくは政治的激動の可能性、契約を勵行する法規の效力、純正なる司法、其の他之れに類する原因に依存する。政治的危險が同樣なる事情の下に於いては、貨幣の利子、若しくは資本の純利潤は、之れに對する需要と比較せられたる使用を求めつゝある資本の定量に從つて變化す可きである。資本の供給及び需要は絶えず互に相反する人間性に於ける二つの强力なる原理の相對的の力に依存する。消費せんとするの願望と節約し若しくは蓄積せんとする願望とが是れである。(Principles, pp. 158-159; cf. Quarterly Review, op. cit., p. 21.)。總利潤は不平等であるが、同一國家に於ける、若しくは同一政情の下に於ける純利潤は平等若しくは之れに近かる可きである。(Principles, pp. 161-162.)。彼れは純利潤の中庸の水準若しくは平均を廻つて資本の報酬の不斷の動搖の存することを注意し、而して、斯くの如きものが貨物の中庸生産費を廻つて其の市場價値若しくは販賣價格に於ける類似の動搖によつて隨伴せられ、若しくは寧ろ、惹起せらるゝことを主張する。(pp. 162-163.)。斯くの如きは實に價値を論ずるに當つて解說せらる可きものであつた。

五

スクロープは價値を論ずるに當つて、先づ一定の絶對價値を看出さんとするの學に基ける混亂を排除せんとする。普通の用語に於いては、健康、機智、美麗、善良の如き願望せらるゝ總べての物は價値を有すると稱せられる。然しながら、經濟學は唯り交換の目的たる物のみを取り扱ふものであつて、斯くて、斯學の論述に於いては、價値は常に商的價値若しくは交換價値を意味しなければならぬ。斯くの如き意味に於いては、價値を有するが爲めには、一の對象が被願望性を有するばかりでは充分ではなく、供給の制限が必要缺く可からざるものである。(pp. 164-165.)。價値は必然純乎たる相對的のものであつて、絶對若しくは眞實價値(positive, absolute, or real value)と言ふが如きものは存することを得ない。(p. 166.)。著者は供給の制限せられたる程度を說くに當つて、稀少性(scarcity, or rarity.)なる語を使用する。稀少性を有する物件の所有者が是れ等のもの〻稀少性に由つて其の取得せられ若しくは生産せられたであらう所の純然たる勞働若しくは資本の費用以上に是れ等のものに對して取得するを得せしめらるゝ增加せられた價値が獨占價値と稱せられる。(p. 168.)。あらゆる市場に於ける財貨の大部分は單に增加せられた比例的出費によつて增加せられた數量に於いて供給せられることが出來る。這般の原理は頗る重要なる歸結に當むものである。價値は時間及び場所に對して密接なる關係を有する。(p. 169.)。耕作によつて大地の表面から産出せられる食料品及び原料品の如き物件を生産するに必要なる費用は唯り是れ等のものを産出する勞働のみならず、又其の生育及び保存に消費せらるゝ時間並びに是れ等のものを市場に齎すが爲めに使用せらるゝ時間及び勞働からも亦成立しなければならぬ。(p. 170.)。特殊の場所に於ける需要が增加する時は、供給は更らに遠隔なる土壤若しくは又更らに劣等なる生産力の土壤から增加せられた費用を以つて取得せられなければならぬことが明かである。然しながら、同一市場に在つて、又同一時に於いて、同一品質の財貨に對しては二個の價格若しくは價値が存し得ないことは確かである。是に於いて乎、上述せるが如き事情の下に於いて生産せらるゝが如き底の物品に對す

る市場に於ける需要が增加する時は、是れ等のものゝ全供給の該市場に於ける價値は最大なる費用を以つて其の市場に於いて生産せらるゝ供給部分の價値の水準まで引き上げられなければならぬことゝなる。若し、此の供給部分が其の價格を支配することを得ないとしたならば、そは販賣に致さるゝことがないであらう。而して若し這般の部分が其の價格を支配することが出來るならば、販賣せらるゝ數量の餘の部分は總べて皆然る可きである。此の最後の部分の生産者は恰も其の生産費を償還せられるに過ぎない。而も、更らに輕易なる事情の下に於いて生産せらるゝあらゆる他の部分の生産者は生産費以上の餘剩を取得す可きである。而して這般の餘剩は其の市場に對する接近、土壤の品質、交通の便宜、若しくは彼れ等の産物が産出せられ販賣に致さるゝ其の他の好事情より生ずるより大なる比較的利益に比例してより大なる可きである。（pp. 171-172.）。

スクロープに從へば、土地の地代を構成する所のものは斯くの如き餘剩である。而も、彼れは地代が、其の通常の語義に於いては、斯くの如き土壤又は地位の自然的又は偶然的利益から生じつゝある獨占利得の外に、多くの他のものを包含することを認める。（p. 173.）。彼れは一千八百三十一年、リチャード・ジョーンズの An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation. Part I.—Rent. を讀んで之れに共鳴し、同年十一月の Quarterly Review 誌上に Jones on the Doctrine of Rent. を掲げ、彼れを以つてリカードオの「みじめな理論に對して最後の一撃」を加ふる者となした。（ibid., p. 81.）。而して、彼れは其の『原理』に於いて、リカードオが地代に定義して「地代は土壤の原始且つ不滅の力の使用に對して地主に支拂はるゝ土地の收益の部分である」と做せるを捉へ、之れを文字通りに解釋して、斯くの如き定義は人爲的改良より生じつゝある地代の大なる部分の總べて、並びに市場、交通機關、肥料其の他に關する好地位の結果である他の大なる部分の總べてを除外すると做した。（p. 174 note.）。然も、彼れ自身、後天的若しくは人爲的利益に歸せられ得る地代の部分が斯くの如く費されたる資本に對する利潤を表示しつゝあるものと考へられなければならぬことを認めて居つた。（pp. 173-174.）。彼れは恐らくジョーンズと共に、リカードオの地代說を寬大に解釋することなきの非難を甘受せざるを得ざるものであらう。市場又は肥料への接近に關する特殊の利益より生ずる部分と土壤の卓越せる自然的沃度より生ずる部分（洵に、後者は、前者と連接せらるゝの外、地代の泉源に非ざるが故に、是れ等の兩者は全然同一である）とを以つて、獨占利得のあらゆる性格を有すると做せる彼れは、次いで、有益なる獨占を有害なる獨占より區別し、地代が價格の要素に非ざることを說き、地主階級の效用を論じ、而して最後に獨占に關する準則を掲げる。（pp. 175-184.）。

次いで、スクロープは需要供給の透徹せる論述を行ひ、玆に均衡概念を驅使する。彼れは需要及び供給の範圍に於ける變動の一時的及び永續的原因、恒久的及び不定的需要、及び價格に於ける變化に比例的なる需要に於ける變化と比例的ならざる其れとを區別した。（pp. 185-187.）。供給に影響する一時的及び偶然的諸原因は必然的に生産費に關係するものではない。他方に於いて、財貨に對する需要に應ず可き其の平均的供給を永久的に又大體に於いて決定する所のものは、其の必要生産費なる一般的名稱の下に包含せしめらるゝを得可き所のものである。（pp. 187-188.）。生産費は（一）生産及び販賣に要する勞働、資本、並びに時間、（二）獨占によつて生ぜしめらるゝ附加的費用、（三）租稅から成る。就中。最も重要なるものは勞働、資本及び時間より成る費用部分である。彼れは貨幣費用に對して眞實費用を認め、後者を以つて一定物件の生産に要せらるゝ勞働、資本及び時間の實際の高を表示するものであり、其の助けとして利用せられ得る總べての種類の熟練、知識及び施設の大小と共に變化するものと做した。あらゆる種類の貨物の生産過程に於ける總べての改良は、時間、資本若しくは勞働の節約によつて貨物の生

産費を減少するの大目的に向つて貢献する。(pp. 188-189.)、あらゆる物品を生産するの費用が結局に於いて其の價格(即ち販賣價値)を決定しなければならぬことは極めて明白なる事實である。蓋し、這般の費用を充分に償ふに足るの價格が取得せらるゝに非ざれば、何人と雖も、斯くの如き經費を以つて、販賣の爲めに之れを生産し續けることとなかる可きが故である。急激なる需要增加若しくは偶然の供給不足は屢々這般の水準以上に價格を引き上げ、又い減少せる需要若しくは需要以上に出でたる不慮の供給增加は其の以下に價格を引き下ぐることある可きも、而も斯くの如き結果は一時的のものであつて、需要及び供給の兩者の不斷の傾向は均衡に歸するに在る。而して、價格が之れを廻つて動搖する點は、恰も、其の時及び場所に於いて其の生産の費用を充分に償ふ可き該貨物の販賣價格である。(p. 198.)。加之、供給及び需要は相互に作用し又反作用する。斯くて、永續的需要增加は概して一時的價格下落によつて確立せられる。需要增加は利潤を增大するによつて其の企業に新たなる投機者を吸引し、而して次第に供給を增加する。個人的生産者の競爭は斯くの如くして絶えず供給と需要とを等しからしむるに資しつゝあるのである。(p. 199.)。

著者は、一定市場に於ける一定財貨の供給が需要を超過し、其の賣價をして本原的生産費以下に引き下ぐるに至る時は、是れ等のものゝ過多(glut)が存すると稱せられると說き、部分的過多より一般的過多に論及し、而して、一國の總べての市場に於いて、啻だに一物品若しくは少數物品のみならず、貨物の大多數若しくは大集團の一般的にして且つ同時の過多が存するを得るや否やは是れ迄經濟學者等によつて論爭せらるゝこと多く且つ熱烈であつた問題であると做した。總べての種類の財貨が往々其の正味原價以下で販賣せられることは商業界の人々に餘りにも知れ渡つてゐる所である。(pp. 211-212.)。而も、著者は斯くの如き現象を以つて單純且つ自然なる生産の諸法則から發した事物自然の秩序に於ける變態ではなくして、社會共同體の支配者の詭計若しくは愚策によつて導入せられる或る一定の人爲的攪亂的原因の力によつて生ぜしめらるゝ所のものであると牆摩する。(p. 214.)。彼れを以つて觀れば、一般的過多は貨幣の一般的交換價値に於ける騰貴に等しいものであつて、財貨の供給過度の證左ではなくして、其の財貨が交換せられなければならぬ貨幣の供給不足の其れである。(p. 215.)。貨幣は價値の尺度として使用せらるゝが故に、必然其れ自體價値に於いて不變である可きである。是に於いて乎、彼れは、交換の媒介物として或る種の貨幣の使用を厲行しながら、其の價値に於いて變化し易きことに對して何等の警戒をも行ふことなく、斯くの如き變化をして交易の全過程を攪亂するがまゝに委して顧みざる政府の無知と怠慢とを痛歎しなければならなかつたのである。(p. 216.)。一般的逼迫及び流通貨幣稀少の時期に於いて、尙ほ一層大なる財貨量が暫くの間其の生産者に對する持續的損失に於いて依然として生産せられ、販賣せられる。斯くの如きは主として二箇の事情に基くものである。第一は、斯くの如き時期に於いて固定資本を賣拂ふことの不可能なる事情であり、第二は、一定の業務に於ける有利なる價格の缺乏によつて生ぜしめられた窮迫其の者が其の生産を增加するの傾向あることである。勞作者は箇數賃銀下落の結果として一層烈しき勞働を行ひ、而して資本家も亦同樣に、破滅を免れんとあせり、もがいて增加せる販賣によつて減少せる利潤を償はんと試みる。(pp. 212-313.)。

總べて這般の生産增加は過剩を大ならしむに由つて尙ほ一層の價格下落を生ぜしめ、而して生産者に對して一層の損失を來さしめるに資する。然しながら、スクローブを以つて觀れば、精神界及び物質界に於けると等しく、經濟界に於いても亦、早晩、自己の治療法を看出すことのない禍害は極めて尠ない。持續的損失を以つて增加せる數量に於いて生産せらるゝ財貨の法外なる廉價は、或ひは更らに低く更らに數多き購買者階級に對して其の消費の道

を開き、或ひは他の財貨に代つて使用せられ、若しくは從來適用せらるゝことのなかつた諸目的に供用せられる。其の間に於いて、經費を減少せんとする生産者等の焦慮は、彼れ等を驅つて、新たなる機械若しくは方法の發明に赴かしめる。斯くて損失價格に於ける財貨の大なるストックの犧牲を通じて新たにして擴張せられた需要が確立せられる時までに、生産者が從前と同一の價格に於いて這般の需要に應じて猶ほ利潤を擧げ得るが如きことが屢々起るのである。（pp. 213-214.）。

スクローブは本書の再版たる一千八百七十三年の Political Economy for Plain People. Applied to the Past and Present State of Britain. に於いて、過剰の不自然性に關する所説を削除し、而して、其の心理的影響を説ける一段を挿入してゐる。商業的及び産業的企業の最も顯著にして且つ疑問の餘地なき特質の一は、概して凡そ八九年の間隔を置いて興憤狀態と沈滯狀態との間を絶えず動搖する其の傾向である。疑ひもなく、斯くの如きは大部分主として、極度の興憤の後には常に反動が來り、――希望と過度の樂觀的期待の發熱の後には疑懼と失望の寒けが來る人心組織の法則に歸せらるゝを得るものである。或る時機に於いては、信用及び信頼は普遍的なるが故に、貨幣は低廉且つ豊富である。俄然、最も微弱なる經營の或るものが瓦解し、パニックが起り、普遍的信用に次いで普遍的不信用が來り、寒けが再び生じつゝあるのである。倒潰の後、敗殘物が取り除かれ、而して生き殘つた商人等が相互に於ける、若しくは彼れ等の事業の成功に於ける其の信念を回復する迄には數年を要する。（ibid., pp. 173-174.）。スクローブは斯くの如き挿入を行つたのであるが、而も彼れは初版に於ける主張を全然放棄した譯ではなく、這般の變化が過れる貨幣法規によつて一層甚しからしめられたことを説いてゐる。然しながら、極端なる意氣衝天と一般的信頼とが、一定期間の後、激變によつて、又等しく極端なる不信用によつて伴はるゝ人心の自然的傾向に關する彼れの見解が正しいとしたならば、「如何なる法律の制定と雖も全然斯くの如き信用の動搖を抑制し得ざることが明かである」。（ibid., p. 304.）。スクローブの『原理』の初版と再版との間に於いて、ウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズの週期説は、一千八百六十二年、ブリチッシ・アッソシェーション の爲めに行つた研究報告 On the Study of Periodic Commercial Fluctuations. 及び一千八百六十六年に Journal of the Statistical Society of London. に登載せられた Frequent Pressure in the Money Market. に於いて既に其の發達を示して居り、又、ジョン・ミルスは一千八百六十六年十月五日、マンチェスターの國民社會科學協會（National Social Science Association.）に於いて The Bank Charter Act and the Late Panic. を、次いで六十七年十二月十一日、マンチェスター統計協會（The Manchester Statistical Society.）に於いて Credit Cycles and the Origin of Commercial Panics. を朗讀して居つたことを記憶す可きである。殊にミルスは、此の後の報告中に於いて、恐慌は十箇年間に一回規則正しく發生することを述べ、而して這般の循環期を以つて商人及び銀行家の心裡に於ける信念と希望とが週期的に破壞せらるゝに基くものと思惟したのである。スクローブは恐らく是れ等の人々の所説によつて示唆せられる所があつたのであらう。

六

スクローブは其の著の主要目的を以つて、富の最大なる總生産が其の最衡平なる分配を確保し、而して同時に最大なる人間幸福の總計を生ずるに資する同じく平明且つ單純なる自然權の諸原理から生ずることを立證せんとするに在るものと做してゐる。彼れは生活に取つて望ましき物の衡平なる分配を是れ等のものゝ均等なる分配を意味するものと解釋せる博愛家を以つて大なる誤謬を犯せるものと觀てゐる。（1st ed., p. 218.）。著者は個人の肉體的並

び に精神的能力及び素質の間に自然に存しつゝある相違を認め、而して、各箇の勞作者に對して自己の盡力の所產を裁定授與するによつてのみ最大なる努力は喚起せられるものと做してゐる。偶發的事情は疑ひもなく、這般の自然的且つ必然的條件の不平等を增大する。而も、是れ等のものゝ影響に干涉するは、安全でも又正しいことでもないであらう。蓋し、或る個人が偶發事によつて取得する利益を豫見及び企畫の結果たる其れから分離することは殆んど不可能であるからである。（p. 219.）。

次いで著者は新たに產出せられたる富の總べてが自然に分配せらるゝ種々なる水路を調査する。（p. 225.）。勞働者、資本家及び地主の諸階級は彼れ等が富の生產に彼れ等の持分を寄與する割合に於いて生產せらるゝ富の分配を受くる衡平なる權利を有することが明かである。然しながら、何人により、又如何なる規矩により、關係當事者の或る者が如何なる割合に於いて富の一定部分の生產に寄與したるかが決定せらる可きであるか。如何に努力せらるゝも、如何なる事後の分析と雖も、敢て、是れ等相異れる當事者等の種々なる寄與が其の生產に協力したであらう所の程度を何等かの精確さを以つて發見すると稱することを得ない。其の所有者の評價から離れては、勞働、土地及び資本の相對的價値の如何なる共通の尺度も存することがない。こは唯り斯くの如き寄與が爲され若しくは協定せられたる時に於いてのみ確められ得るものであり、又關係當事者等自身以外の如何なる他の判官によつても、又、彼れ等が任意的に相互に條件を決定する以外の如何なる他の方法によつても確めらるゝを得ざるものである。略言すれば、こは唯り前以つて彼れ等の間に行はるゝ取引若しくは契約によつてのみ確められ得るものである。（pp. 227-228.）。一言にして盡せば、自由交換のみ唯り彼れ等の結合產物に對する其の相對的主張の公平なる調整を來さしめることが出來る。洵に、豫め合意の存しない場合には、慣習が是れ等の問題の決定せらる可き一種の標準を確立するであらう。然しながら、慣習其の者は近隣の人々の中で同樣の事情の下に置かれた當事者等の自由且つ任意の合意の平均から成るものである。賃銀、利子若しくは地代の最低若しくは最高の孰れかを設定する法律によるが如く、苟も一般に斯くの如き合意を拘束せんとするの舉は是れ等のものゝ正當なる高の唯一の規範を破壞し、而して、盲目且つ專斷なる力を以つて之れに代ふるものである。（pp. 228-229.）。而も、彼れは其の勞働組合の是認に現はれてゐるが如く、勞作者等の契約力を保護する以上に出づることのない如何なる特殊の方策にも贊することを敢て辭せなかつたのである。（2nd ed., op. cit., p. 340.）。

著者は次いで農業、工業及び商業の各々に就いて其の發達、小分及び效用を論じ、ロバート・オーエンの勞働券及び勞働交換所の計畫に言及し、現存するが如き全社會體制は「一大勞働交換所」（one great labour exchange）なることを特筆大書し、（pp. 243-244.）、諸生產階級が密接に纏絡せられ括結せられて社會的織物の經及び緯を形成することを說き、（p. 253.）、而して、農業に對して與へらるゝ特惠は人口及び生存資料の不自然なる現存關係に基くものと述べてゐる。（pp. 254-256.）。

七

スクロープが本書及び他の舊出版物に於ける一の本原的目的は、經濟學の根本的公理として久しく世人に押し付けられて居つた最も毒惡なる定說を排擊するに在つた。即ち「人口が取得し得る生存の資料を超過するの傾向」が是れである。（p. xvi.）。彼れは增加しつゝある人口に對す食料供給の歷史を述べて、土壤の沃度遞減に關する經濟學者の誤謬を指摘する。（pp. 266-268.）。通常の事情の下に於いては、劣惡なる品質の土壤の耕作は一人民の生產力增加と資源擴大を明白に表示せるものと宣言せらるゝを得可きである。吾人が斯くの如き手段を取るならば、そは、

經濟學者の宣明するが如く、吾人が縱令ひ增加せる費用に於いても食料を獲得するの嚴烈なる必要によつて然るに非ずして、却つて、そは單に、吾人が農業及び其の補助的技術に於ける改善によつて、比較的遠方に於ける猶ほ未耕作の狀態に殘存する第一等地より之れを齎すか若しくは吾人自身を斯くの如き土壤に移すの甚しく愚劣なる策に出づるよりもより小なる犧牲に於いて吾人に接近せる劣等なる土壤から之れを取得することを得せしめらるゝに存するを得るのである。彼れは移住に對してマルサスよりも大なる重要性を置く。(pp. 268-269.)。彼れは此の地球が食料の生產に取つて無限の能力を有することを說く。(pp. 269-276.)。彼れを以つて觀れば、人間の食料の供給に對して、從つて又人口の增加に對して何等の必然的障礙若しくは極限も猶ほ未だ存することなく、又曾つて存したることなきは明かである。(p. 277.)。禍患は人間の罪惡と痴愚の結果であつて、如何なる固有の自然法の其れでもない。(p. 278.)。食料及びあらゆる種類の資本は容易に人口よりも速かに增加せしめらるゝを得可きである。斯くて又、社會に於ける各個人の平均的配分は不斷に增加することを得せしめらる可きである。(p. 281.)。彼れは愼重なる人口の制限に關するマルサスの敎義の愚昧、有害、邪惡を痛擊する。(pp. 282-283.)。食料に對する人口の壓迫は唯り人民若しくは其の支配者の側に於ける豫見及び管理の缺如に基くを得るものである。(p. 285.)。愼重の眞の方向は食料及び富の增加に存す可きであつて、人口數と幸福との制限に存す可きではない。(pp. 286-287.)。スクローブは本書の出版に先き立ち、Quarterly Review. の一千八百三十一年四月號に Malthus and Sadler on Population. を揭げて居つた。

著者は章を新たにして貧困の諸原因を叙し、英國勞働階級の歷史を述べ、救貧法の起原、其の原理、其の手段及び目的、其の效果、之れに對するマルサス流の偏見、其の改正、相互保險基金、愛蘭に對する救貧法の必要に就いて論じ、而して最後に移民を以つて貧民に對し總べての時、總べての事情に於いて利用し得可き方法なりと主張する。然しながら、彼れは、其の住民の盡力を抑壓し、彼れ等の勤勞の自然的方向と其の產物の自然にして衡平なる分配に干涉する立法的拘束の賦課及び存續に由るに非ざれば、其の人口の使役及び安樂なる扶持に對する其の國內の資源が不足を感ぜらる可き或る國が果して歐洲に存するや否やを以つて甚しき疑問であると思惟したのである。而して、彼れは是れ等の人爲的にして不必要且つ有害なる束縛を四種に分つて逐次考察する。(一)農業に對する拘束、(二)商業に對するもの、(三)製造業に對するもの、(四)過度にして誤用せられたる課稅、(五)公正なる富の分配に對する拘束が是れである。(p. 339.)。而して、彼れは交換の用具に對する拘束を論ずるに當つて、所謂「計表本位」(tabular standard)の構成を主張する。

彼れは一千八百三十年 On Credit Currency and its Superiority to Coin, in support of a petition for the establishment of a cheap, safe and sufficient Circulating Medium. と題する序文七頁本文八十四頁の小冊子を公にし、次いで、同三十三年 An Examination of the Bank Charter Question, with an inquiry into the nature of a just standard of value, and suggestions for the improvement of our monetary system. と題する七十七頁の小冊子を出版して當時の貨幣論爭に參加して居つたのであるが、同年更らに是れ等の兩短論篇中に表明せられたる意見を其の『經濟學の諸原理』中に取り入れたのである。

貨幣は是れに依つて財貨の總べての交換が遂行せられる用具である。而して、信用は常に鑄貨よりも遙かに大なる範圍まで價値の流通に對する媒體として使用せられる。信用は自由でなければならぬ。(pp. 398-399.)。政府の干涉をして正當ならしむる唯一のものは更らに大なる便宜と安固と價値の安定とを之れに與ふるに在る。(pp. 400-

401.)。價値の安定なくんば、貨幣は價値の眞尺度たるを得ない。(p. 403.)。總べての種類の貨幣は他の一切の物と等しく、其の供給及び需要の關係に從つて價値を變ずる。(p. 404.)。單一なる貨物は如何なるものと雖も、價値の眞尺度たることを得ない。(p. 405.)。是に於いて乎、スクロープは、物價の平均値の時々の騰貴若しくは下落を示すやうに、其の相對的消費に相當する數量に於いて排列せられた一般に使用せらるゝ物品の夥しき數の一覽表を有する正確なる時價表の定期的公表によつて價値の法定原基を補正するか、若しくは少くとも個人に對して其の誤差を確むるの手段を供給せんことを提唱したのである。そは商的目的に取つて望ましき總べての確實性を以つて貨幣價値に於ける變動を指示す可く、而して、個人にして適當と思惟するならば、彼れ等をして此の計表本位に照し合せて彼れ等の金錢上の契約を調整するを得せしむ可きである。(pp. 406-407.)。著者は次いで本位貨幣の價値變化によつて債權者及び債務者、收稅者及び納稅者の兩者に及ぼす害惡、銀行券の增減による貨幣價値の變化等を論じて、紙幣の供給をして確固たらしむるが爲めに採用せられ得る方法として(一)發券の完全なる自由と(二)國立銀行の計畫とを擧げる。(pp. 417-419.)。著者は、最後に、貨幣制度の改革を提議して本章を終る。(第一)、一千七百七十三年以前に行はれた古き銀本位を以つて一千八百十六年に初めて價値の單一なる法定本位として確立せられた是れよりも遙かに動搖し勝ちであり且つ不便なる金本位に代らしむること、(二)英蘭銀行の獨占を廢止し、蘇蘭に於けるが如く、世人の信賴を確保す可き規模と信用とを有する發券會社の間に於ける競爭自由の制度か、然らざれば私銀行業務若しくは其の他の業務と結合せらるゝことなく、議會の委員會によつて管理せらるゝ國立銀行(National or State bank)の設立を以つて之れに代ふ可きこと、(三)國內の諸銀行による紙券の發行が、若し許さるゝとしたならば、其の支拂の保證として其の全額に達する擔保の供託によつてのみ唯り承認せらる可きこと、(四)大數の貨物の平均價格の計表的一覽表が管轄官廳によつて適當なる期間に公表せらる可きことが是れである。(pp. 423-424.)。彼れは更らに一千八百四十二年、六十二頁の小冊子 Thoughts on the Currency. を出版した。

八

本書は前文二十四頁、本文四百五十七頁より成る袖珍判一卷である。玆には其の口繪として掲げられてゐる前記世界人口密度圖及び表題頁を寫眞版として載せることゝした。私藏本は著者の贈呈本である。此の書は曩きに一言せるが如く、一千八百七十三年、其の表題を改めて再版を出した。前文二十五頁本文三百五十三頁より成るものである。而も、後の經濟思想に及ぼした本書の影響は極めて尠少である。オピー氏(Redvers Opie)は The Quarterly Journal of Economics. 誌の一千九百三十年第四十四卷に A Neglected English Economist: George Poulett Scrope. を草してゐる。

スクロープは政治經濟方面の研究に沒頭して全く地質學の研究を拋棄した譯ではなく、一千八百五十六年及び五十九年には、フンボルト(Alexander Humboldt)、フォン・ブーフ(Christian Leopold von Buch)等獨逸學者の火口昇隆說を論駁して之れに致命的打擊を與へた。彼れは六十七年、地質學會よりウラストン賞牌(Wollaston medal)を授與せられ、翌年議會を退いて後は再び地質學に其の注意の大なる部分を割くことゝなり、而して、自己の精力減退して旅行を行ひ得ざるに至つた後は、少壯學者を援助して火山地帶を踏査せしめ、視力衰耗せるに拘らず、猶ほ其のペンを離ずことなく、短きノートと論爭的書翰とを記して居つた。彼れは一千八百七十六年一月十九日サリ郡コッブアム附近のフェーアローンで死んだ。彼れは妻の死後、前記カッスル・コームを賣り拂つた。妻のエマは結婚後幾許もなく落馬したのが本で長く廢人となつて居つた。晩年、再婚したが、孰れの妻にも子はなかつた。